

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26560332

研究課題名(和文) 学び続ける専門職としての体育・スポーツ指導者養成における「わざ言語」の活用

研究課題名(英文) Utilization of 'Waza-Gengo (Craft Language)' to Foster Physical Education Teachers and Sports Leaders as Continuous Learning Professionals

研究代表者

岩田 靖 (IWATA, Yasushi)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：60213295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「わざ言語」を活用しながら、学び続ける専門職としての体育・スポーツ指導者を養成するカリキュラムの開発であった。

次の3点について明らかにした。(1) 教員養成段階の保健体育専攻学生が考え得る「指導ことば」の特徴を明らかにした。(2) 「指導ことば」に着目し、それに対する視点の育成を意図した教科教育法の模擬授業における成果を検証した。(3) 体育の教科専門科目における器械運動の実技実習的な授業の中で、実際の授業の結果を対象にして事例的に記述した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop a curriculum to foster physical education teachers and sports leaders as professionals who continue to learn while utilizing 'Waza-Gengo (Craft Language)'.

We clarified the following three points. (1) We revealed the characteristics of "instructional words" that physical education major students in a teacher training program could think. (2) Focusing on "instructional words", we verified the effects in simulated classes of a method course intended to train the viewpoint. (3) In demonstration lessons on apparatus gymnastics in a content area subject course for physical education, we described cases as a target for the results of actual classes.

研究分野：スポーツ教育学

キーワード：教師教育 教員養成 教育実習 保健体育科教育 わざ言語 指導ことば スポーツ指導者 言葉かけ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

これまでの体育科指導では、「生徒の動きを的確に変えるには、説明的な言葉での指導だけでは不十分で、生徒の感覚に訴える指示の言葉が必要」(小林 2000)とされ、「指導ことば」が用いられてきた。一方、特に伝統芸能の伝承において、指導者が持つある種の身体感覚を学習者と共有するための媒介として「わざ言語」が注目されている。「わざ言語」とは、「様々な『わざ』の世界でその伝承の折に頻用される、科学言語や記述言語とは異なる独特な言語表現」のことである(生田・北村 2011)。スポーツや伝統芸能の指導における「わざ言語」の活用については研究が行われてきている(北村 科研費 14580010)。本研究では、「わざ言語」を用いて学習者を指導できる体育科教員及びスポーツ指導者を養成する教員・指導者養成カリキュラムを開発する。

(2) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯とこれまでの研究成果を進展させる内容

研究代表者はこれまで、体育科教員・スポーツ指導者の養成及び研修に携わってきた。ボール運動の教材開発や体ほぐし運動の実践研究指導を行う中で、教育実習生の教壇実習では、児童・生徒に望ましい動作を生じさせるための“言語”を用いていないこと、そして教員養成課程においてそのための指導を教育実習前に体系的に行っていないことに気づいた。そこで、本研究では、教科教育・教科専門・教育科学の研究者が「授業研究アリーナ」方式で連携して研究を行う。

(3) 本研究が、どのような点で斬新なアイデアやチャレンジ性を有しているか

これまでの教職課程では、教員免許状取得に必要な教科に関する科目と教職に関する科目を履修させるために、各教員が個別に担当科目の目標と内容を設定して、講義・演習を行ってきた。しかし、学生がこれらの知識と技能を統合する場合は「教育実習」しか用意されてきていなかった。そこで、教科専門・教科教育各領域の知識と技能を統合して体育・スポーツ指導ができるように、教科の専門性を授業実践につなげるための仕組みとして、「わざ言語」を手がかりにする。

このことにより、体育学、運動学、学校保健学、野外教育、スポーツバイオメカニクス等を専門とする教科専門教員が、保健体育科教育学を専門とする教科教育教員、さらに教育工学・授業研究を専門とする教育科学教員と協働しながらの教員養成カリキュラム開発を可能にする。

(4) 本研究が、新しい原理の発展や斬新な着想や方法論の提案を行うものである点

信州大学で採択された 2007～2009 年度大学院 GP「授業研究アリーナで共創する臨床の知 - 教科専門と教科教育のチーム指導体

制で高める現職教員の教科指導力 -」の目的は、専門教科の学問的知識に裏打ちされた授業研究を通じてアクション・リサーチができる現職教員の授業展開力を向上させること、そのための体制づくりとして教科専門教員・教科教育教員・教育科学教員のチーム指導体制を構築すること、の 2 点であった。複数教員によるチーム指導体制「授業研究アリーナ」は、教科専門教員の理論知、教科教育教員の実践知、現職教員の経験知を交流させることにより、新たな「臨床の知」の創出に繋がった。授業の設計・実施・省察の各段階において、教科専門教員は教科の基盤となる学問領域の基本概念・方法の観点から、教科教育教員は教科の目的論・内容論・方法論・教材論の観点から、現職教員の授業研究を支援・指導した。

本研究では、この協働的授業研究モデルを、体育教員・スポーツ指導者養成カリキュラム開発に適用する。このことは、教職志望学生や現職教員を協働的にチーム指導することにとどまらず、カリキュラム開発に際しても、このモデルが適用可能なことを示すことになる。

(5) 本研究が成功した場合に卓越した成果が期待できるものである点

中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「学び続ける教員」を支援する仕組みの構築が求められている。養成段階から「わざ言語」による体育・スポーツ指導の方法を学ぶことによって、指導者と学習者の間に身体感覚の共有という関係性を「わざ言語」を媒介にして構築できる指導者としての持続的成長を支援することができる。また、教員免許状更新講習にも「わざ言語」を導入することで現職教員研修にも寄与できる。

さらに、本研究で提案する「わざ言語」を導入した指導者養成カリキュラムは、体育・スポーツ分野だけではなく、他の実技系教科にも援用できるものである。よって、本研究の成果を広く公表することによって、教職課程の充実が求められる状況下で、本学部だけではなく他の教員養成系大学・学部および教職課程を持つ多くの大学・学部にとって、音楽科、図画工作・美術科、技術・家庭科等における教員養成・教員研修に「わざ言語」を導入したカリキュラムを提案できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「わざ言語」を活用しながら、学び続ける専門職としての体育・スポーツ指導者を養成するカリキュラムの開発である。そこで、具体的に次の各研究課題に取り組む。

- (1) 体育・スポーツ指導時にどのような「わざ言語」が用いられているか：小中学校の体育授業や青少年教育施設において用いられている「わざ言語」を明らかにする。
- (2) 教員・指導者養成課程でどのような指導

をすると「わざ言語」を用いることができるか：「わざ言語」を用いた指導ができるよう教科指導法科目及び教科専門科目を開発する。

- (3) 教育実習生は「わざ言語」を用いて体育・スポーツ指導ができるようになるか：大学で指導を受けた学生の教育実習・臨地演習中の「わざ言語」の用いられ方を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 2014年度にS大学教育学部で開講された中等体育科指導法演習（受講生：男子29名、女子8名、計37名、全員教育実習を経験済の3年次生）の授業において実施した8回の模擬授業を対象とし、受講生が毎回の模擬授業終了後に記入した振り返りシートにおける記述内容を分析した。なお、模擬授業で取り上げた具体的な内容は、多様な動きをつくる運動（投動作、捕球動作）、ハードル走（走から跳の組み合わせ、跳から走の組み合わせ）、ベースボール型ゲーム（打撃動作）、マット運動（伸膝前転、前方倒立回転跳び）である。
- (2) 2016年度にS大学で開講された中等体育科指導法演習で実施した6回の模擬授業およびその前後に実施した2回の「言葉かけ研究会」に参加した受講生34名を対象とした。中等体育科指導法演習の模擬授業で取り上げた具体的な内容は、ハードル走、ベースボール型、マット運動、体づくり運動：投動作、走り高跳び、跳び箱運動、である。
- 中等体育科指導法演習では、実施した模擬授業を教師役、児童・生徒役、観察者役といった多面的な視点から振り返り、よりよい授業へ向けた授業改善の方略を検討することを主たる目的としている。また、受講生は、模擬授業実施後に「言葉かけチャレンジ映像」をeラーニングによって視聴し、授業外の時間を活用した課題に取り組むこととしている。
- (3) 小学校教員免許取得希望者を対象とした体育の教科専門科目における器械運動の実技実習的な授業の中で、受講生の実技能力に対応して、授業の中での習得率の高い技は何か（授業において新たに達成できる傾向の高い技は何か）、受講生にとって指導言語の有効性を実感しやすい技は何か、という2つの観点から、実際の授業の結果を対象にして事例的に記述した。
- (4) 国内学会・研究会等に参加して、関連領域の研究者との交流を通して情報収集を進めることと合わせて、これまでの成果を発表して意見交換した。

4. 研究成果

- (1) 「指導ことば」を用いることが可能な教科指導の力量形成を意図する教員養成功力

リキュラムの開発に向けた基礎的研究として、教員養成段階の保健体育専攻学生が考え得る「指導ことば」の特徴を明らかにした。模擬授業において、運動技能に改善が必要であると思われる受講生が活動している場面を中心として抽出した「言葉かけチャレンジ映像」を視聴させ、運動技能の向上を促すオリジナルの言葉かけを考案させることを課題とし、時間的経過に伴う言葉かけの変容と運動領域別にみた言葉かけの特徴について考察を行ったところ、以下の5つの点について言及することができる。

運動技能に改善を要する学生の映像を視聴して、言葉かけにチャレンジするといった課題を繰り返し遂行することは、「指導ことば」に対する視点を育むにあたって有効に機能していたものと考えられる。

投動作・捕球動作・打撃動作のように、物や用具を扱うタイプの運動では、擬音語による「指導ことば」を用いる傾向がみられた。

ハードル走のように、走動作や跳動作といった動きの達成度を高めていくタイプの運動では、動きを随伴的に引き出す「指導ことば」を用いる傾向がみられた。

マット運動のように、新たな動きを獲得・形成するタイプの運動では、比喻によってイメージを引き出す「指導ことば」を用いる傾向がみられた。

投動作におけるスナップ動作、打撃動作におけるインパクト動作、ハードル走におけるクリアランス動作といった運動観察の対象となりやすい主要局面を取り上げた「指導ことば」が多いという特徴がみられた。

- (2) 子どもが運動を感覚的に理解したり、運動課題を解決するためのイメージを膨らませたりすることができる「指導ことば」に着目し、それに対する視点の育成を意図した教科教育法の模擬授業における成果を検証した。その結果、次の3点が明らかになった。

全6回の模擬授業の前後に実施した「言葉かけ研究会」においては、受講生の言葉かけに質的変容がみられた。

言葉かけに質的変容が見られた受講生は、運動実施にかかわるつまずきの分析が適確であり、それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようと試みていた。

つまずきの分析は適確であっても、それを学習者に伝達されやすいような言葉に再構成しようとするところに課題が存在していた。

- (3) 小学校教員免許取得希望者を対象とした体育の教科専門科目における器械運動の実技実習的な授業の中で、実際の授業の結

果を対象にして事例的に記述した。その結果、次の2点が明らかになった。

鉄棒運動系は総じて授業開始時における習得率が低く、授業の中で新たな達成に導く可能性を大いに有している。なかでも、前方支持回転、後方支持回転は受講生の積極的なチャレンジがみられ、新たな達成率も高いことが確認された。

特に、鉄棒運動系の前方支持回転は、受講生たちの多くが有している「素朴概念」との関係から、教師の指導言語の有用性を極めて鮮明に、そして印象的に経験しうる可能性が高いことが示された。

- (4) 研究成果を、日本体育学会、日本スポーツ教育学会、日本科学教育学会、日本教育メディア学会の大会・研究会において研究発表して、関連領域の研究者との交流を通して情報収集・意見交換を行った。詳細は、「5. 主な発表論文等」に示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

岩田靖・藤田育郎、運動学習の促進に向けた「指導言語」の有用性に関する積極的体験：教員養成段階の実技演習における事例的検討、長野体育学研究、23、19-29、2017年、査読無

鈴木海平・藤田育郎、スマッシュ技能の習得に向けた教材・教具の開発：体育授業におけるバドミントンの学習指導に向けた基礎的研究、信州大学教育学部研究論集、10、135-144、2017年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/00019526>

吉田陽平・中曾根佑哉・井出大樹・藤田育郎、中学校段階における走り幅跳びの学習指導に関する検討：跳躍動作のキネマティクス分析を通して、信州大学教育学部研究論集、10、145-156、2017年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/00019527>

藤田育郎・高山幸一、体育授業における「指導ことば」に対する視点の育成、日本教育メディア学会研究会論集、42、1-4、2017年、査読無

藤田育郎・丸山真央・下郷貴広、小学校低学年段階における捕球技能の学習指導 - ボールゲーム授業におけるゴロ捕球動作に着目して -、信州大学教育学部研究論集、9、205-216、2016年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/00018726>

浅井雅大・藤田育郎、教員養成段階の保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴 - e-Learning による体育模擬授業のリフレクション課題を通して -、信州大学教育学部研究論集、9、71-79、2016年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/00018716>

岩田靖、攻守一体プレイのネット型ゲー

ムの教材づくりに向けて、体育科教育(特集「攻守一体プレイのネット型ゲームの可能性」)、2015年9月号、14-17、2015年、査読無

井浦徹・中塚洋介・山岸真大・岩田靖、「ダブルバウンド・テニス」の教材づくり、体育科教育(特集「攻守一体プレイのネット型ゲームの可能性」)、2015年9月号、36-39、2015年、査読無

井浦徹・岩田靖・堀口はるか・中村恭之、小学校体育における「ゴール型」ゲームの教材づくりとその実践的検討 - 「スクウェア・セストボール」の分析 -、教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)、15、45-54、2014年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/18280>

小林真理子・岩田靖・佐々木優、小学校体育における「リズム遊び」の授業づくり - 「感じのある動きの探究」の視点から -、教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)、15、55-64、2014年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/18281>

藤田育郎・齋藤美香・酒井拓也、運動に対する愛好的態度と運動有能感を育む体育指導についての考察 - 定時制高等学校における「運動の日常化」を目指した実践を通して -、教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)、15、73-81、2014年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/18283>

宮尾美輝・岩田靖・佐藤大将、有効性のあるアウトナンバー・ゲームを求めて - 小学校体育における「ドライブ・バスケットボール」の分析 -、教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)、15、93-102、2014年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/18285>

吉澤高志・江口貴昭・岩田靖・河合大地、小学校体育におけるゴール型ゲーム(ラインタイプ)の教材づくりとその実践的検討 - 「セイフティーエリア・タッチビー」の分析、教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要)、15、121-130、2014年、査読無

<http://hdl.handle.net/10091/18288>

[学会発表](計4件)

藤田育郎・高山幸一、体育授業における「指導ことば」に対する視点の育成、日本教育メディア学会2016年度第2回研究会、2017年3月4日、信州大学教育学部(長野県長野市)

吉田陽平・藤田育郎、跳躍種目における助走リズムの学習指導に関する検討、日本スポーツ教育学会第36回大会、2016年10月30日、和歌山大学(和歌山県和歌山市)

藤田育郎・吉田陽平、中学校段階におけ

る走り幅跳びの学習指導に関する検討、
日本体育学会第 67 回大会、2016 年 8 月
25 日、大阪体育大学（大阪府泉南郡熊取
町）

藤田育郎・谷塚光典・結城匡啓・安達仁
美・岩田靖・平野吉直、教員養成段階の
保健体育専攻学生が用いる指導ことばの
特徴 - e-Learning による模擬授業のリフ
レクション課題を通して -、平成 26 年度
第 4 回日本科学教育学会研究会（北陸甲
信越支部開催）、2015 年 2 月 28 日、信州
大学教育学部（長野県長野市）

〔図書〕（計 2 件）

岩田靖、大修館書店、ボール運動の教材
を創る - ゲームの魅力をクローズアップ
する授業づくりの探究 -、2016 年、272
岩田靖・高橋健夫・岡出美則・友添秀則 他、
体育授業研究会 編集、大修館書店、よい
体育授業を求めて - 全国からの発信と交
流 -、2015 年、303（94-106）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 靖 (IWATA, Yasushi)
信州大学・学術研究院教育学系・教授
研究者番号：6 0 2 1 3 2 9 5

(2) 研究分担者

藤田 育郎 (FUJITA, Ikuro)
信州大学・学術研究院教育学系・助教
研究者番号：9 0 6 0 8 0 2 7

平野 吉直 (HIRANO, Yoshinao)
信州大学・学術研究院教育学系・教授
研究者番号：4 0 2 9 3 5 3 4

結城 匡啓 (YUKI, Masahiro)
信州大学・学術研究院教育学系・教授
研究者番号：9 0 3 0 2 3 9 8

安達 仁美 (ADACHI, Hitomi)
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号：3 0 5 0 6 7 1 2

谷塚 光典 (YATSUKA, Mitsunori)
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号：3 0 3 2 3 2 3 1